

これからの薬剤師に求められる中医学 中医学との出会い ～中医専門薬局としての取り組み

毛塚 重行
Shigeyuki Kezuka

さくら堂漢方薬局

さくら堂漢方薬局の毛塚と申します。本日は私の中医学との出会い，それから現在の取り組みということで，全編自己紹介のような形で進めてまいりますので，宜しくお付き合いいただければと思います。

まず，ちょっと写りが悪いのですが，これは18歳の私でございます（図1）。数十年前ですね。高校を卒業してこれから大学に進学するというときです。私の実家はもともと両親が薬局を営んでおられて，よく「パパママ薬局」と言われましたけれども，薬，化粧品，日用雑貨，なんでもある，そういう薬局で生まれ育ちました。私はそこを継ぐということが嫌で嫌で堪らなかったのですが，薬学部に進んでしまうわけなのですね。

■ 中医学との出会い

私が進学したのが，八王子にございます東京薬科大学です。八王子の山のなかに大学がございます。3年生のときに選択科目で東洋医学概論というのがございまして，これを選択しました。この講義を担当なさっていたのが，今日座長をされています猪越英明先生のお父様でいらっしゃいます猪越恭也先生でした。猪越恭也先生については，本学会のホームページでも，中医学を日本に取り入れた先駆者として紹介されています。私はここでまず中医学と出会うことになります。ただ，このときには，選択科目として受講していたのですけれども，将来の仕事として東洋医学・中医学に携わるといことは考えていませんでした。

そのあと，金沢大学の薬用植物園に大学院生として入ります。この薬用植物園を指導されていたのが御影雅幸先生で，御影先生は「生薬の品質を追究していくのがこの薬用植物園の使命である」ということをよく言われていました。そのうち，私はだんだんと，品質といっても使ってみないとわからないのではないかと考えるようになりまして，生薬を実際に用いることに興味を覚えていきます。で



図1



中医専門薬局
吉祥寺東西薬局に就職

吉祥寺東西薬局
井の頭通り沿いで約40年、『中国医学の知恵を日本の家庭に！』がモットーの漢方薬局です。漢方相談の他にも、家庭で実践できる中医学教室も開催しています。(ホームページより)

中医学や相談販売の方法を学ぶ

図2

すから、大学の図書室で漢方に関する本を読み漁るようになっていくわけなのですね。そのときに、大学時代に受講していた猪越恭也先生の講義を思い出して、一度、猪越先生をお訪ねして色々な話をうかがいました。それが非常に刺激になって、中医学を志すことを決めました。またたまたまそのときに、同じ金沢大学の別の研究室に南京中医薬大学から留学生として来ていた張工或先生と出会いました。

その張先生にも色々なお話をうかがって、中医学への思いが深まっていくわけなのですが、結局、修士課程を終えて、猪越恭也先生が主宰されている吉祥寺東西薬局に就職することになります(図2)。吉祥寺東西薬局については、ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、ホームページに「井の頭通り沿いで約40年、『中国医学の知恵を日本の家庭に！』がモットーの漢方薬局です。漢方相談の他にも、家庭で実践できる中医学教室も開催しています。」と紹介されている薬局です。この薬局に就職して、4年半ほどお世話になりました。この間に、中医学も勉強させていただきましたし、中医学以外の販売に関することや、さまざまなことを学ばせていただきました。これが現在の薬局運営に大きく役に立っています。この4年半の間に、東京でするので色々な勉強会に参加する機会がございました。色々な勉強会に参加していると、同じ中国医学でもさまざまな考え方があることに気づき始めまして、「いったいどれが本当の中医学なのだろう」というような悩みも生じてきました。それと同時に、その頃、栃木の実家から「そろそろ戻ってこいや」というような声がかかるようになったのですね。自分では中医学に関してあやふやな状態で実家に戻るということに非常に不安を覚えておりまして、そこで中国に留学することを決意することになります。そして、中国留学を考えたときに思い出したのが、金沢大学時代の張工或先生だったのですね。

張工或先生を頼って南京へ留学することになります。張先生にも色々なことを教わり、それ以外にもさまざまな先生に出会っているのですけれども、非常に影響を受けた先生がこの写真の黄煌先生です(図3)。この方も日本留学の経験があって、日本語ができるというのが非常に心強いわけなのですが、日本でも書籍を出版されている有名な先生で、公私ともにたいへんお世話になりました。この黄煌先生の言葉で非常に私の印象に残っていることがあります。先ほど中国留学のきっかけとして、中医学の世界にも色々な意見があるということを申し上げましたが、黄先生は「中医学というのは、地域によって、時代によって、人によっ



図3



図4

て異なるのだよ」とおっしゃいました。違いがあつて当然だということなのですね。「勉強するときには、いま勉強しているのがどの地域の中医学か、いつの時代の中医学か、だれの中医学か、それを意識して勉強なさい」と。そして、「最終的に、毛塚さん、あなた自身の中医学ができればいいのですよ」というふうに教えていただきました。これが自分にとって非常に強い柱になっているというふうに思います。

その後、帰国しまして、しばらくは両親と一緒にやっていたのですが、自分で薬局を独立開業いたします（図4）。左上に桜が若干かかっておりますけれども、最初は桜並木のそばで薬局を開局しました。さくら堂漢方薬局の名前の由来が、その桜並木なのですけれども、マンションの1階部分で、狭いところでしたが、ここで9年少し営業しまして、その後、昨年6月から新しい店舗に移りました。この新しい店舗というのは、両親がやっていたところです。両親が薬局を開けて更地にしたところに私の薬局を建てさせていただきました。

■ 中医専門薬局としての取り組み

ここから、私が現在も行っております取り組みについてお話します。抄録集の39ページにまとめられておりますが、これは（図5）いま実際に自分が取り組んでいることを思い出しながらあげていったものです。

ちょっとこれを見ていきますと、まず「軽医療」と書きました。どこからが軽くてどこからが重いというのは、なかなか難しいですけれども、病院へ行くほどでない、カゼの初期といったものを意図しています。

2番目の「家庭医学」というのは、常備薬として、薬箱のなかに漢方薬を入れていただいでそれを活用していただくということです。例えばカゼで葛根湯などが有名ですけれども、葛根湯だけではダメですよということで、いくつかの漢方薬を置いていただき、それを状況に合わせて間違いなく使っていただけるようにご指導しようということです。

3番目に「病院での治療の補佐」と書きました。実際に薬局に来られる方の多くは、病院で治療中の方が多いわけなのですが、そういう場合に、漢方薬も併用してより効果を高めたい、あるいは西洋薬の副作用を軽減したいというようなことの意味合いですね。

中医専門薬局としての取り組み

- 1 軽医療
- 2 家庭医学
- 3 病院での治療の補佐
- 4 病気の予防・健康維持
- 5 地域での啓蒙普及活動
- 6 薬学部生への教育
- 7 中医学の学習

図5

中医専門薬局としての取り組み

1 軽医療

対象：病院へ行くほどでない
軽度の病症の治療
中医学に基づいて状況を判断し、必要な
薬品（漢方薬・中成薬）を販売。
食養生などの紹介と活用できる生薬配合
食品の販売。

図6

そのほか「病気の予防・健康維持」「地域での啓蒙普及活動」、それからまさにこれからの薬剤師ということですが、「薬学部生への教育」として、そういう方々への教育にも少し携わらせていただいています。最後の「中医学の学習」というのは抄録集にはないのですけれども、学習は継続していかなければいけませんので、これを付け加えました。

これらを少し具体的に見ていきたいと思えます。

まず、「軽医療」(図6)です。病院に行くほどでないというのは、少し曖昧なことですが、これは3番目の病院に行っていらっしゃる方でも同じことなのですが、「中医学に基づいて状況を判断し、必要な薬品（漢方薬・中成薬）を販売」あるいは「食養生などの紹介と活用できる生薬配合食品の販売」をするわけです。中成薬というのは中国で中医処方にもとづいて製剤化されたものです。実際に販売するものには、日本で医薬品として許可を受けているものもありますし、あるいは薬草のなかには、中国では医薬品として認知されていても日本ではあくまでも食品というものもありますので、そういったものは食品として販売することになります。法律的に見てみますと、1つには、薬局製造販売医薬品。俗に薬局製剤と呼ばれていますが、薬局で製剤するものがございまして。薬局で製造できる製剤というのは決まっております、そのほとんどが煎じ薬ですけれども、なかには丸剤、散剤、軟膏剤などがございまして。もう1つは一般用医薬品として認められているもので、漢方薬・中成薬の多くは第2類医薬品となっております。それから、少数の第3類医薬品、あるいは指定第2類医薬品などがございまして。

次に2番目の「家庭医学」(図7)、つまり家庭の常備薬としての販売ですけれども、たんに製剤を売るだけでなく、わかりやすい使い分けなどの資料をお渡ししながらそういったものを販売するということですね。例えばカゼの場合は、やはり早い初期治療というのが大切になりまして、大きく分けると「赤いカゼ」と「青いカゼ」がありますよというように、中医学的には風熱証といわれる状態だったり、風寒証といわれる状態だったりするわけですが、そこをわかりやすく区別できるようにしています。そういう場合にはこういう薬を使いましょう、あるいは咳がひどい場合でこういうときにはこういう薬を使いましょうと、こちらで販売できる医薬品の写真を載せて使い分けを間違わないで使っていただけるようにしています。

「病院での治療の補佐」(図8)は1番と同じですね。「中医学に基づいて状況



図 11



図 12

は、これは栃木の仲間で作った食養生の表なのですが（図 11）、先ほど気と血と水で分けているのがありましたが、それと非常にリンクしてしまっていて、例えば「気が滞っている人にはこういう食材がいいですよ」というような説明ができるようになっていきます。

あるいは、最近是一般の方でも瘀血という言葉をよく知っていて、患者さんのほうから「私、瘀血かしら？」という話が出たりします。瘀血は万病のもとという言われ方をしますが、血流に関して一般の方も非常に関心が高いということですね。例えば「未病～瘀血のはなし」といった小冊子を作って、こういったものを利用して未病の啓蒙に役立てています。小冊子のなかには、例えば同じ瘀血でもどういう瘀血があるかが書いてあり、自分がどういう瘀血に入るかということがチェックできるようになっています。

それから、「地域での啓蒙普及活動」（図 12）です。これは薬局へ来られる方ではなくて、そのほかの方にいかに啓蒙していくかということに取り組んでおります。これはたまたま講演会をやらせていただいたものですが（同図の右写真）、こういった講演会でお話したり、あるいは記事を書いたりしています。最近では、「婦人科の重要生薬 当归」ということでお話させていただきました。月に 1 回程度のペースで、もう 10 年ほど書かせていただいているのですが、こういう記事を見て来られる方も結構いらっしゃいます。

それから「薬学部生への教育」（図 13）です。私がもともと猪越恭也先生の教育がスタートになっていますので、こういったことも非常に重要だと思います。現在私がやらせていただいているのは、次のようなものです。薬学部の 5 年生になりますと、実務実習というのが課せられていまして、病院実習・薬局実習があるのですが、薬局実習の際には薬局の機能すべてを学ばなくてはいけないということで、そのなかに薬局製剤の実習もあり、煎じ薬を作ったり、丸剤を作ったりすることが課せられています。これらは、実習生を受け入れる薬局ですべてを賄えるわけではないので、漢方実習に関しては漢方薬局にサポートに入ってもらおうというのがよくあります。そのサポートで、これは宇都宮市で実習をしている学生さんたちに、とある薬局を借りて実習を行っている風景です。年間 40 人くらいの薬学生の方々に、主に煎じ薬の作り方ですけれども、指導させていただいています。

それから「中医学の学習」ということですが（図 14）、日本で書かれた本もあ

中医専門薬局としての取り組み

6 薬学部生への教育



図 13

中医専門薬局としての取り組み

7 中医学の学習



図 14

りますし、中国の本もございます。あるいは、中国の本を翻訳したのも多数出回っており、こういったものを使って勉強するわけですが、なかなか1人で勉強を続けるというのは難しいわけなのですね。そこで、色々な勉強会があるので、そういったところに入って、みんなで勉強していくということが非常に有効です。そのなかで、例えば去年は、上海のそばの南通市というところに行ったのですが、中国の現場を見学して、いろいろ実際の学習にもなりますし、やる気を鼓舞することにもなります。中国研修という機会も設けて学習を続けているということでございます。

駆け足になりましたけれども、以上が私の取り組みでございます。